

さみしい夜の句会報 第67号 (2022. 12. 25-2022. 12. 31)

- ◆ 参加者: 菊池洋勝、石川聡、soundonly、石原とつき、霧雨魔理沙、のこりか庵、たろりずむ、水の眠り、秋鹿町、しまねこくん、雪上牡丹、餅馬勝、hyutoppa、岡村知昭、電車侍、小沢史、かなず梨山、碧、とるばとる、月硝子、輪井ゆう、花野玖、Elio、森内詩紋、日下昊、和泉明月子、藤井皐、太代祐一、金瀬達雄、ゆりのはな、Masako、susumu、さー、むくみんママ、西脇祥貴、水星の長い午後、あき、山田真佐明、鴨川ねぎ、日月星香、マ、式定住佳、うたたね凜、とわさき芽ぐみ、雲上晴也、海馬、蔭一郎、岩瀬百、みさきゆう、直美、ハルウ、雷(らい)、まつりべきん、宮坂葵哲、流天紳音(るてしお)、おかもとかも、桂輝夜、Ryu'san、donkey、蜜、PERKINS、fuji、手羽たまご、あ、おたま、せば、西沢葉火、かのん、えのきさん、豆、チユーバ、2022、星野響、元さん、しろとよ、yumi、高良俊礼、もゆら、野々原蝶子、既刊委託中の汐田かるま、木野清瀬、水須ゆき子、東ころ、汐射ハルカ、檜崎進弘、タケ、俳句データベースドットコム、月波与生(八五名)

◆ 7・7詩、5・7・5詩

影踏みの鬼を負ぶっている冬至 蔭一郎  
起き抜けにオルタナティブを買いに行く しろとよ  
誤解してしまふサンタがあの一ひとで 東ころ  
悴みて雨降る前に書く手紙 hyutoppa  
木枯らしの舌の赤さは記録済み 海馬  
物語に見放された殺し屋の元素一覧 石原とつき  
ヤンマガの表紙をかざる二次曲線 おかもとかも  
火の海にいろ入れ食いの左ねじ 西脇祥貴  
オイコラとタココラ重ね着膨れる しまねこくん

業またはサンバとしても使えます おかもとかも  
あらずしも覚えていない年の暮れ 宮坂変哲  
レスラーにしては水中花に似てる 岡村知昭  
信長のポニーテールに課金する 秋鹿町  
てのひらの木造平屋一戸建 西沢葉火  
眼球の半ばは淡いほら話 西脇祥貴  
生活音に厚みが無いと叱られている 岩瀬百  
一人前になろういなり寿司で泣け 石原とつき  
知恵の輪に吹き込んだいたシユルレアル 西脇祥貴  
平方四角形の頭突きは花束贈呈 石原とつき  
思春期に浸り続けるおでん種 しまねこくん  
年の瀬にセンチメンタル戦闘機 まつりぺきん  
避妊した段ボールでも肉食だ 秋鹿町  
人波をゆくペンギンを見せようか 海馬  
全身のオノマトペが湯に溶けてゆく 岩瀬百  
母方の祖父に山手線のタトゥー 太代祐一  
はじまりはいつも十二月のコップ 蔭一郎  
しまうまにそして一輪車に踏まれ 岡村知昭  
電線の余りで作る注連飾り しまねこくん  
深呼吸すれば半濁点の肺 とわさき芽ぐみ  
隠された秘密もきつと明石焼き 雪上牡丹餅  
ペヤングの白い部分に感じちゃう 雪上牡丹餅  
ポン酢ポン酢生乾きでもいいよね 秋鹿町  
君よりもマッサージチェアの美声 太代祐一  
ポン酢への愛の止まらぬ比叡山 岡村知昭  
ぬるすぎてピアスの穴が見つからぬ 小沢史  
お年寄りの冬晴れの棒高跳びの押忍！ 石原とつき

徳川の埋蔵金や朴落葉 菊池洋勝  
夜廻りの拍子木聞いてみかん剥く 水の眠り  
透過する年越しそばの素材集 石川聡

除夜の鐘 聴ひて戸締まり 床に就く 霧雨魔理沙  
コイントス表が出たら天城越え たろりずむ  
時間切れ告げるタイマー姫はじめ 馬勝  
除夜詣 栗炒る湯気の 温さかな 電車侍  
あんたたち酒の肴よ大晦日 かなず  
片恋の日記焚火に笑われる 月硝子  
大晦日まだ熱い太陽も血も 輪井ゆう  
禍にありて御用納もひとりきり 花野玖  
高いシの音で啜りこむ晦日蕎麦 森内詩紋  
春を焦がれる我が身は凍え冬深く 日下昊  
嫁であるわたしを恨む大晦日 和泉明月子  
世界共和国立南極ペンギン大学初代学長ピース 金瀬達雄  
牛乳屋セールスに来る年の暮 ゆりのはなこ  
マフラーがもふもふになる成長期 MAFUSHI  
内視鏡の管の絡まる大晦日 SYUSYU  
ぼくこんなこわいえかけるよと五歳 さー  
年の瀬に洗濯機の手入れしてる 日月星香  
ありがとう逢えて良かったさようなら 式定住佳  
仕事納めて無口の始まり うたたね凜  
旅雑誌顎でおさえる炬燵の間 雲上晴也  
大晦日お味噌か醤油 k  
砂浜の近くの路地の浜の砂 雷  
雪山の家の灯りのたのもしさ 流天  
佛を手放す冬の銀河哉 桂輝夜  
初めての昆虫食はサンリから Ryu\_sen  
傲慢さはいて捨てる勇氣あれば donkey  
吐き出した紫煙に踊るあれやこれ 蜜  
寅彦忌駱駝の鈴の音に醒むる PERCHES  
行く年 来た年 その残穢 fuu  
ばんぺいゆ 掲示者詰めて私信とす 手羽たまご  
盗まれた言葉も御用納です あ

年末年始や終末に忘れる恋はその程度 おたま

イエス様は重箱の隅に居る！ 藤井阜

年の瀬や炭水化物襲来す 鴨川ねぎ

寒いから淋しと思うそれだけよ せば

雪空に まなざしのごと 真白の塔 かのん

ケンケンパ長き道のり冬の空 チューバ 2022

救世主休眠状態冬うらら 星野響

夢の中の枯野から出られず死ぬ ぎんぎん

海そして光輝く詩の痛み 高良俊礼

青白くはやくなびいて冬の雲 山田真佐明

トナカイがサンタを抱き終電車 木野清瀬

朴落葉ストロガノフは立ちん坊 月波与生

◆ 7・7、5・7・5以外の短詩

あの人の隣に名前並んでるただそれだけでコイって跳ねる

さー  
途中からハミングになる壁越しの歌をはきはき歌ってみて

る みさきゆう  
投影機ひらひら揺れる君の手は深海魚のようマルセイユ辺

り 水星の長い午後  
年越せぬと医師診立てける猫生のアディショナルタイム続

くめでたさ のこりか庵  
行ってきます、今日も明日も明後日もいつも変わらぬ毎日

をと 水の眠り  
指先が冷たいきみの手を繋ぐ気づかれぬよう後ろで繋ぐ

とるばどーる  
記憶の中のやさしい人はまたひとつ遠さかりゆく むくみ

んママ

凍る町救急車のサイレンが昨日と今日の狭間を駆ける あ  
き  
上弦へ望遠鏡を向けたなら猫たち踊る豊かの海に 鴨川ね  
ぎ

しなやかな君の手触り気を静め話す愚痴にも優しくしつぽ  
直美

エゴばかり押し通してはいいねせず誰でも出キル一方通行  
えのきさん

星の降る広い夜空を飛んでゆく自由の空気が踊る 𠄎  
夜の闇そっと静けさ舞い降りて孤独な時間一人ためいき  
元さん

北風に揺れる電線悲しげに家路促す冬の黄昏時 もゆら  
ひさかたの光も分かち合う子らもそれらすべてが我にはあ  
らじ 汐田かるま

中腰になると跳び乗る猫がゐて前世を思ひ出しさうになる  
水須ゆき子

◆ 詩

希なる望みを

歯を食い縛り

あるいは爆笑と共に

形にするきつと形にする (soundOnly)

新しい年が来るのを待ち望む  
ことが出来ずにただ夜になり  
いつの日か夢の様な話だと  
今想っても遅い過去を (Emily)

窓際を気遣う人と夜半の冬

コンビニの買い出しまでに夜冴ゆる

すが漏のカーポート下とつとつす (山田真佐明)

孤独孤独孤独孤独孤独孤独孤独孤独孤独孤独孤独孤独孤独孤独  
孤独孤独孤独孤独孤独孤独孤独孤独孤独孤独孤独孤独孤独孤独  
孤独孤独孤独孤独孤独孤独孤独孤独孤独孤独孤独孤独孤独孤独  
孤独孤独孤独孤独孤独孤独孤独孤独孤独孤独孤独孤独孤独孤独  
(はるう)

愛し合うふたりが沈黙し続けているときだけ、そばに流れる美しい川があつて、その川のきらめきを僕に分けてくたさいと言つても、誰も分けてくれないだろう、それが、愛し合うつていうことなら、僕の孤独は誰にも奪えないまま、雪原に立つ牡鹿になって首を伸ばし、森の向こうからやってくる朝日を見つめ、まつ毛の先に、雪が、触れるはずなんだ。

目を覚ますたびに、僕はどうして、傷ついているのだろう。どうやったつて、誰かが必ず、死にたいと思つている朝に目覚めるということを、僕は無視して、生きていけなかった。(野々原蝶子)

#### ◆作品評から

高いシの音で啜りこむ晦日蕎麦 森内詩紋

～すごい勢いで啜つてる！(汐射ハルカ)

風邪薬の消費期限へ貼る値札 菊池洋勝

～割引の値札は消費期限を隠すように貼られることが多い(と感ずる)。古い風邪薬は効き目が悪いのか(と感ずる)。みなさま、風邪薬のお世話にはならずによい年をお迎えください。(月波与生)

藤棚を背なかに貼ってくれないか 太代祐一

～背中ではなく何故か「背なか」。背一面に咲く藤は見事なものである。リアルでは沼津の藤棚は美しかった。(月波与生)

母方の祖父に山手線のタトウー 太代祐一

～「母方の祖父」と限定することでリアリティを持たせつつ、「山手線のタトウー」という柳味のある違和の世界。本当にそんなタトウーがあるなら、見てみたいかも。(まっりぺきん)

禍にありて御用納もひとりきり 花野玖

～カチツとした句ですけど「禍にありて」だと社会性が出てしまいメッセージ性も含まれてしまうので、上五は無意味なものの方がいいかと。

ポンジュース御用納もひとりきり (蔭一郎)

北国の季語を選んで開ける窓 とわさき芽ぐみ

～仙台市より南へ住んだことがないので南国の生活に憧れる。であるが「北国の季語を選ぶ」に愛と勇気を感じた。(月波与生)

画質良し青空好児だけがいる 藤井卓

～球児がないのはどうしたことか。違和感は画質がよくなったからだろうか。いつもと変わらない日常が少しずつ崩れていく。(月波与生)

お年寄りの冬晴れの棒高跳びの押忍！

～男性ならブブカ。女性ならイシンバエワ。(檜崎進弘)

ときどきは少女にもどりセロリ噛む syusyu

〜このような想像をしてしまうセロリは不思議な野菜。  
セロリを毎日食べてしよっちゆう少女に戻ってほしい。(月  
波与生)

夜廻りの拍子木聞いてみかん剥く 水の眠り

〜この御句好きです (とるばどーる)

寒いから淋しと思うそれだけよ せば

〜この句ものすごく共感します。淋しさってそんなもの  
ですよ。(タケ<sup>㊟</sup>俳句データベース ドットコム)